

日本語学習者の学習段階別による 慣用句の理解実態に関する研究*

宋 誓 天**

日本の中学校の国語科の教育課程では、慣用句を含む成句が国語教育においても知識としての習得のみならず、実際の言語活動の中で活用できるように重要視されていると示している。そこで本稿では、韓国の日本語教育における慣用句教育を考える手始めとして、日本の文部省検定済の『国語』教科書に載せられている慣用句を取出し、韓国人学習者の段階別による理解度を分析した。

まず動詞慣用句について、慣用句の前部に同じ身体語彙があっても後部に多義動詞が用いられるもの、後部要素の意味の実質生が強いもの、感情や心情・態度を表すもの、表現型慣用句、比喩的慣用句のそれぞれの例に対し日本語学習者の理解度を分析した。形容詞慣用句は、その出現頻度は動詞慣用句に比べ極めて少ない反面、学習者の理解度は動詞慣用句より低いと調査された。故事成句の場合は、中学校以後に偏って現れ、その後の理解度は下向しているのが分かった。一般的に慣用句についての理解は全体的な日本語学習力に比べ低いと言える。そのため本研究ではより現実的な観点から実態調査を行い、日本語教育における慣用句学習の必要性を明らかにした。また日本語教育現場にも適用できるように学習段階別の体系的な研究はこれからも肝要であると言える。

キーワード： 動詞慣用句、形容詞慣用句、故事成句

1. はじめに

国際化の進展する中で、異なる歴史や文化・伝統などの理解を培う外国語教育が求められている。その一貫として、韓国の『教育人的資源部』では、2003年に外国語高等学校の日本文化という言語材料的性

* 이 논문 또는 저서는 2011년 정부재원(교육과학기술부)으로 한국연구재단의 지원을 받아 연구되었음(NRF-2011-354-A00197)

** 세명대학교 강사

格の教科書『文化を知る¹⁾』を発行する。これは、学習者としては日本についての客観的な知識と日常生活の文化が分かるテキストであり、第6次教育課程では触れなかった日本文化の教育が強調された点で意義がある。

このような日本語教育の変化は日本文化に関する語彙を含め、テキストの全般的な内容にまで影響を及ぼす。その中でも特に注目すべきものは、いわゆる同じ言語文化を背負う人々の慣用によって生じた慣用句やことわざ、格言などの成句である。成句は2つ以上の語句の連結体であって、その全体である固まった意味を表す特有の言い回しである。これらは日本の中学校の国語科の教育課程で「言語事項」のうち「語句についての指導事項²⁾」で次のように示されている。

〔第1学年〕イ．語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意すること

〔第2学年及び第3学年〕イ．慣用句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句の意味や用法に注意すること

ここで慣用句を含む成句が、国語教育においても知識としての習得のみならず、実際の言語活動の中で活用できるように重要視されていることが分かる。しかし成句は「道草を食う、泡を食う、大目玉を食う」のように、正規の文法や語彙規則などでは説明しにくいものが極めて多い。しかし、韓国の日本語教育では慣用句の理解を当人の自然の会得にまかせているのが現状であり、従来の慣用句の研究も統語論・意味論的な観点での比較研究が多く、まだ日本語教育における体系的な研究までは行われていない。

本稿では韓国の日本語教育における慣用句教育を考える手始めとし

1) 教育人的資源部(2003)『文化を知る』두산, pp.4-20.

全12課で構成され、それぞれの単元は次のようになっている。「①風土、②衣生活、③食生活、④住居生活、⑤社会生活、⑥大衆文化、⑦人生儀礼、⑧文学世界、⑨伝統公演・芸術、⑩祭り、政治・経済、国際関係」

2) 文部科学省(1998)『中学校学習指導要領』文部科学省, pp.9-11.

て、まず日本の文部省検定済の『国語』教科書に載せられている慣用句を取出し分類を行った。またそれらに対する韓国人学習者の理解度を学習段階別に分析し、その実態を探ってみる。

2. 先行研究

国語教育や日本語教育の観点からは金子百合子(1985)、阪田雪子(1985)、島本基(1998)などがあげられる。まず金子百合子(1985)³⁾は国語教育における慣用句を中学校の学習指導要領(文部省編：1981)の国語科全体の目標から紹介している。

また『中学校国語指導資料第2集・言語事項の学習指導(文部省編：1980)』では、慣用句を「連語意識は残っていても、慣用が固定していて単語と同じように使われるもの」と定義し、次いで「連語や慣用句を一括して“成句”ともいうこと、ただし“成句”はことわざや故事成語を指して使われることが多い。慣用句と見るか、ことわざあるいは故事成語と見るかについては、区別のつけにくいものもあり、生徒の語彙を豊かにするためには、併せて指導の計画の中に入れるべきである」と指摘している。

阪田雪子(1985)⁴⁾は外国語を習得するということは「自国語のそれとは必ずしも一致しない慣用的な用法を個々に覚えていくということにはほかならない」と言い、慣用句に関する学習能力を高める上からは「句の背景となっている事柄に対する、学習者を納得させうるに足る教師の説明やそれに代わるものとしての適切な辞書(とは言っても、恐らく普通の意味の辞書では無理であろうが)を与えることが不可欠である。」と言う。

島本基(1998)⁵⁾は、「常用慣用句一覧(宮地裕：1982)」や朝日新聞

3) 金子百合子(1985)「国語教育における慣用句」『日本語学』4-1、明治書院、pp.77-78.

4) 阪田雪子(1985)「日本語教育における慣用句」『日本語学』4-1、明治書院、pp.89-90.

5) 島本基(1998)「日本語教育と慣用句—いつ・どれだけ・どれを—」『無差』第5号、京

社説から抜き出した語群(両方の異なり語数は1990句)を参考に、学習入門期からの過程を視野に入れて慣用句を考察している。日本語学習者にとって難しい慣用句のタイプとして次の五つを挙げている。

- ① 意味不明のことばが含まれ、辞書の説明もわかりにくい
- ② 使われる状況、心情が理解しにくい
- ③ その比喩が想像可能の限界を超える
- ④ 使われる場面に制限がありそうがよくわからない
- ⑤ 動詞を含む慣用句で語尾の活用などに制限がある

このように慣用句の概念や分類を含めそれに関連した分野(例えばことわざ・格言・連語など)との境界に関する研究にはこれと言った確固たるものはない。しかし日本での国語教育の観点から考察してみると次の定義があげられる。

広義一他の言語表現との相対的概念として特色を持つもう一つの違った体系の言語表現 ①決まり文句(挨拶語、「足が出る」等の常套語)
②特定の言い回し(擬態語・擬声語「かもしれない」などの一定の形で用いられる語句)③故事成語・諺・格言等④限られた社会でのみ通用する語(官庁用語・学術用語等)⑤熟語等6)

そのため本稿では日本語学習者の母語とを比べ言語表現上の慣用的な言い回しを包括した広義の概念を前提とする。また慣用句の分類においては、宮地裕(1982)⁷⁾の「慣用句解説」に従うことにする。

都外国語大学日本語学科、p.69.

6) 国語教育研究所編(1991)『国語教育研究大辞典』明治図書、p.151.

7) 宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院、pp.238-265.

3. 調査の概要

3.1 調査資料とその範囲

調査の資料は日本の小・中・高校で国語科用(文部省検定済)の『国語』教科書の33冊⁸⁾から取り出した慣用句である。資料の抽出は主に『日本語慣用句辞典』(米川明彦他、2005、東京堂)『諺大事典(第一版)』(1982、小学館)『慣用表現辞典』(奥山益郎、1994、東京堂)を参考にした。〈表1〉は教科書別に抽出された慣用句の数は出版社を問わず、学年順の新出の異なり語句だけを「動詞慣用句・形容詞慣用句・故事成句」などで分類したものである。因みにこの分類は宮地裕(1982: 242~246)の品詞別特徴に基づいて行った。

〈表 1〉『国語』教科書別の慣用句の総数

教科書		動詞 慣用句	形容詞 慣用句	故事成 句	その他	合計
出版社	学年					
小学校 (東/光)	1	5/5	-/-	-/-	-/1	5/6
	2	11/8	1/-	-/-	-/-	12/8
	3	12/7	-/-	-/-	-/-	12/7
	4	15/12	-/1	-/1	-/-	15/14
	5	16/23	-/3	-/-	-/-	16/26
	6	11/25	-/4	6/1	-/1	17/31
中等 (学/村)	1	30/30	7/3	-/6	-/2	37/41
	2	21/20	-/2	-/1	-/1	21/24
	3	18/35	4/3	-/16	1/1	23/55
高等 (三/第)	現代文	58/46	13/10	6/12	2/2	79/70
	総合国語	18/16	3/1	-/5	-/1	21/23
合計		215/227 (442)	28/27 (55)	12/42 (54)	3/9 (12)	258/305 (563)

8) 小学校：東京書籍(=東)/12冊、光村図書(=光)/10冊(5年と6年は統合教科書)
 中学校：学校図書(=学)/3冊、光村図書(=村)/3冊
 高校(現代文・総合国語)：三省堂(=三)/2冊、第1学習社(=第)/2冊

3.2 調査の被験者

本調査の被験者は韓国の大学校で日本語・日本文学関連を専攻している韓国人学習者である。日本語能力試験実施案内(2011)に基づいて3つのグループに分けた。〈表2〉で分かるように初級グループ(= k c)が68名、中級グループ(= k b)が82名、上級グループ(= k a)が77名である。資料の回答句数が多いため被験者の一人あたり一週間おきに平均4回のアンケート調査を実施した。一回のアンケートは時間を30分以内と制限し、それぞれの慣用句に対し自らの理解度を五段階評価で尋ね、知らない句(①と②)の場合は言葉から推測される意味を書いてももらった⁹⁾。

〈表 2〉 アンケート資料総数および内訳

グループ		被験者の内訳		人 数	
k	k c	大学1年～大学2年	N3級以下	68	227
	k b	大学2年～大学3年	N2級	82	
	k a	大学3年～大学4年	N1級	77	

4. 分析の結果

4.1 動詞慣用句に対するkの理解度

宮地裕(1982: 242)は別掲「常用慣用句」の63%が動詞慣用句であると述べているが、本調査では全563句のうち動詞慣用句が442句で全体の78.5%にも占めている。それぞれ学年別の理解度は〈表3〉と〈図1〉のようになる。

9)

	①	②	③	④	⑤
句の意味	全然分らない	推測のみ	分かる	分かる	よく分かる
句の使用	全然できない	できない	できない	できる	よくできる

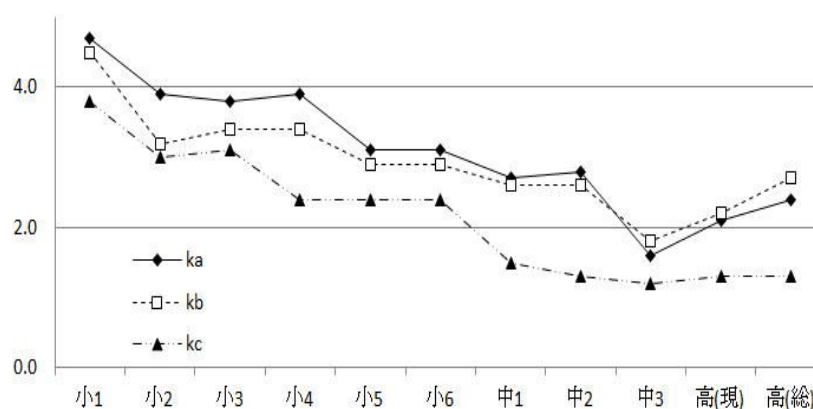
〈表 3〉 k の動詞慣用句の理解度

学年別 (語句数)	小1 (10)	小2 (19)	小3 (19)	小4 (27)	小5 (39)	小6 (36)	中1 (60)	中2 (41)	中3 (53)	高現 (104)	高総 (34)
ka	4.7	3.9	3.8	3.9	3.1	3.1	2.7	2.8	2.2	2.1	2.7
kb	4.5	3.2	3.4	3.4	2.9	2.9	2.6	2.6	1.8	2.2	2.7
kc	3.8	3.0	3.1	2.4	2.4	2.4	1.5	1.3	1.2	1.3	1.3

k の動詞慣用句の理解度は平均「ka(3.2)、kb(2.9)、kc(2.1)」である。まず「kc」はどうでも他のグループに比べ日本語学習能力の差によるものが多いためここでは身体語彙の慣用句のみ探してみる。

「kc」小学1年から小学3年までは「理解度3」を上回ってあるが、小学4年から小学6年までは2点代を、中学校から高校まではわずか「1」代に止まっている。これは小学校で基本的な日常生活を扱っているチャプターが多いため動詞慣用句も「お腹がすく、目が覚める、声をかける」のような使用度の高い身体語彙の慣用句がよく使われるものである。

〈図 1〉 k の動詞慣用句の理解度



しかし学年が上がるにつれて同じ身体語彙であっても「身を清める(1.4)、手に乗る(1.8)、口に運ぶ(2.1)」のように後部要素の意味が実質的でない場合はその理解度がほとんど低い。「k b」は小学1年から4年まで3点以上であるが小学5からは全てが下回っている。これは「k c」に比べ敬語や自動詞、他動詞などのシタクスの学習や語彙がある程度できているためでもあるが、慣用句ではもっと多様な結果が得られた。

ここで身体語彙の慣用句のうち理解度が高いものと低いものの両方の例を挙げてみると例1)と例2)10)になる。

- 1) お目にかける(4.7)、顔色が悪い(4.2)、耳を傾ける(4.1)
肩を並べる(3.8)、肩を貸す(3.7)、身につく(3.8)
2) 鼻にかける(1.8)、息をつく(2.0)、鼻につく(2.1)

例1)と例2)は同じ身体語彙であっても「かける・つく・とる・うつ」などの多義の動詞が用いられた場合にはその理解度の個人差は甚だしい。

- 3) 舌を出す(3.7)、口に合う(4.1)、手が早い(3.8)
舌を巻く(1.8)、口を切る(1.7)、手を反する(1.8)

例3)は、動詞慣用句を構成しているそれぞれの語句が後部要素の意味の実質性が強いもので、日本語の慣用句とほぼ同じ意味を表す韓国語の慣用句の有無による理解度の差が見られる。

例4)と例5)は「気」の慣用句である。日本語の「気」とは、その人に備わった心の傾向・気質・心理・心の動き・意志などを表している反面、韓国語での「기(気)」は日本語より限られた意味でしか使わない。そのため「気」の慣用句においては学年別というより韓国語との類似性による理解度であるとも言える。すなわち日本語の表現型慣用句11)

10) 例についてある()は個々の理解度の数値である。

11) 国広哲弥(1985)「慣用句論」『日本語学』4-1、明治書院、pp.5-8。

国広(1985)では一般に広く慣用句と称するものを「解釈型慣用句(受信型)」と「表

は韓国語の慣用句にも存在するものがあるため学習者の日本語学習レベルの差はあまり見られない。

- 4) 気が重い(3.7/마음이 무겁다)、気を配る(3.6/마음쓰다, 배려하다)、気が遠くなる(3.4/정신이 아득해지다)
- 5) 気が引ける(1.4/주눅들다)、気に病む(1.3/걱정하다)
気が長い(1.8/성미가 느긋하다)、嫌気がさす(1.6/싫증나다)

「k a」は三つのグループのうち日本語学習能力が優れているため理解度も全体的に上位を占めている。小学校のものは平均「理解度3.7」で学習者の個人差もあまり激しくない。しかし多様な文学作品を扱っている中・高校の教科書では、慣用句もより多様な構成語で接続されたり語結合の固定性の強い解釈型慣用句が出現することになる。ここで注目すべきなのは「k a」の理解度が「k b」とあまり差が見られないところである。

このような動きはおおむね次の四つの場合で顕著に現れる。まず例6)の喜怒哀楽の感情を表す心情語彙の慣用句と、例7)のように人間の心掛けや態度を表す場合である。

- 6) 癢癢を起こす、気を揉む、躍起になる、腹にすえかねる
- 7) 腕によりをかける、骨を惜しむ、歯をくいしばる、腕をこまぬく

人間の感情や内面の姿勢、外から見られる態度などは単純な語彙で表せるものではない。特に互い違う言語文化では、同じような言語的表現でも学習者の母語の転移¹²⁾による誤解や誤読が多くなってい

現型慣用句(発信型)」の見分けをしている。

12) 森山新(2000)『認知と第二言語習得』啓明出版、p.85、再引用。
krashen(1981)では、学習者が十分な目標言語を習得していない場合、学習者は発話のきっかけとして、母語のその場限りの翻訳を行うというように、母語をそのまま使用することがあるとしている。このことは母語の転移が学習の初期に多いことを占めている。

(Krashen, S. D. 1981, Second Language Acquisition and Second

る。そのため教科書だけでなく実生活でもより多くの慣用表現が使われているはずであるが「k a」の理解度はほぼ2点前後にしか至らず「k b」との差も見られない。

例8)は表現型慣用句であるが学習者の漢字語彙レベルによる個人差が甚だしくその理解度も「1～4」全般にかけている。

- 8) 正鵠を射る、墓穴をほる、念頭におく、死力を尽くす
 9) やけを起こす、けりがつく、間が抜ける、横車を押す
 尻馬に乗る、胸に一物がある、手を焼く、こけがはえる

例9)は比喩的慣用句で、慣用句を成している構成語句が全体として派生的な意味を持つものである。これらは日本語を母語とする人の言語意識からもその語源が消え失せたものが多いため、少なくとも「k a」のグループに至ってはこの種のものを見極めて学習しておく必要があるのではないかと思われる。

その以外にカタカナの慣用句がある。しかしこの調査資料に限ってはあいにく「ピリオドを打つ」という一句しか得られなかったためここで論じるのは省くようにする。

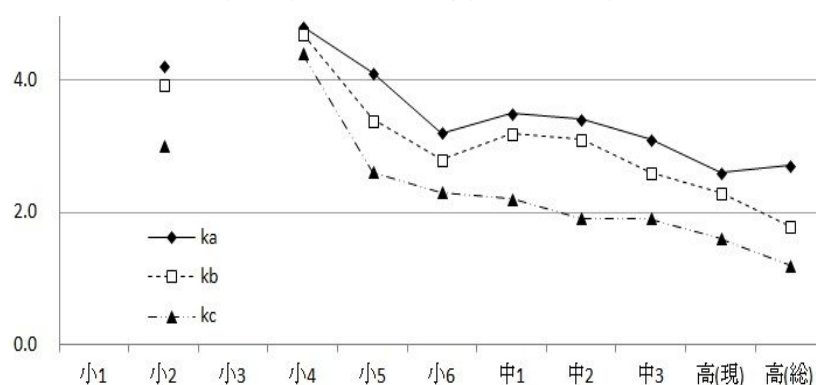
4.2 形容詞慣用句に対する k の理解度

本調査の形容詞慣用句は55句で全体資料の約9.7%になる。そのうち構成語として身体語彙が使われたものは38%(21句)を占めている。また形容詞の部分に「～ない、～ぬ、～ず」のような否定形式が用いられているものは形容詞慣用句の全体の70%(39句)を上回る。このような形容詞慣用句に対するkの理解度をまとめると<表4>と<図2>のようになる。

〈表 4〉 k の形容詞慣用句の理解度

学年別 (語句数)	小1 (0)	小2 (1)	小3 (0)	小4 (1)	小5 (3)	小6 (4)	中1 (10)	中2 (2)	中3 (7)	高現 (23)	高総 (4)
k a	—	4.2	—	4.8	4.1	3.2	3.5	3.4	3.1	2.6	2.7
k b	—	3.9	—	4.7	3.4	2.8	3.2	3.1	2.6	2.3	1.8
k c	—	3.0	—	4.4	2.6	2.3	2.2	1.9	1.9	1.6	1.2

〈図 2〉 k の形容詞慣用句の理解度



形容詞慣用句の出現頻度は動詞慣用句の1.25割に過ぎない。kの形容詞慣用句の平均理解度が「3.5(ka)、3.0(kb)、2.3(kc)」であることを考えると、語句数に比べその理解度は動詞慣用句とあまり差がない。しかし形容詞慣用句は小学校の全般ではほぼ見られず、高校の教科書に傾いて出現しているため動詞慣用句の様態とは異なると言える。

形容詞慣用句の構成語は大きく身体語彙と非身体語彙で分けられる。学年別に身体語彙が用いられた形容詞慣用句は、9句のうち4句(小学校)・19句のうち8句(中学校)・27句のうち7句(高校)とその句数が少しずつ減っている。言い換えれば、学年が上がると見慣れている身体語彙の構成語の代わりに語結合の強い慣用句が出現するため、形容詞慣用句に対するkの理解度が高校に至って著しく劣ってしまう原因の一つにもなる。

例10)は、kの全体から「3.7」以上の高い理解度が得られたものである。これは韓国語においても個々の構成語が全く一致する表現型慣用句であるためである。

- 10) 手がない、 鼻が高い、 気が軽い、 気が重い
 11) 足が早い、 口が重い、 耳が痛い、 目が離せない

例11)は平均理解度「3.5」以上となるものである。しかし例11)は、構成語のいずれかに焦点を当て、それが全体の意味にまで拡大してしまう傾向が見られる。kの全グループから慣用句の持つ一まとまりの意味のある一部分のみを受け入れている傾向が見られる。例12)例13)では否定の形でのみ用いられるものを学年別にあげてみる。

- 12) 手も足も出ない(小6)、 歯が立たない(中1)、
 気がおけない(中1)、 手につかない(中3)、
 歯牙にもかけない(高)、 手ごたえがない(高)

- 13) 元も子もない(小5)、 みっともない(中1)、 非の打ち所がない(中1)、 あてにならない(中2)、 一も二もない(中3)、
 らちが明かない(高)、 突拍子もない(高)、 とりとめもない(高)、 気に食わない(高)

例10)は身体語彙が用いられてはいるが、後項語句との固定性が強くてkにとっては慣用句としての一まとまりの意味が分かりにくくなる。その上、例11)は慣用句を成している構成語句間の連関性がさらに取りにくい比喩的慣用句である。これらに対する平均理解度は「2.6(ka)、2.1(kb)、1.4(kc)」を示し、動詞慣用句よりも学年別の隔りがある。

4.3 故事成句に対するkの理解度

宮地裕(1985: 249)では「漢語語彙の慣用句」という用語を使って

いる。しかし宮地は語彙的な特徴から「墓穴をほる、愁眉を開く、風前の灯、有終の美を飾る」などの漢語名詞が構成語となっている全ての慣用句を称しているため、本稿では「格言やことわざ、漢字で成り立っている熟語」などに限定して「故事成句の慣用句(=故事成句)¹³⁾」と呼ぶことにする。

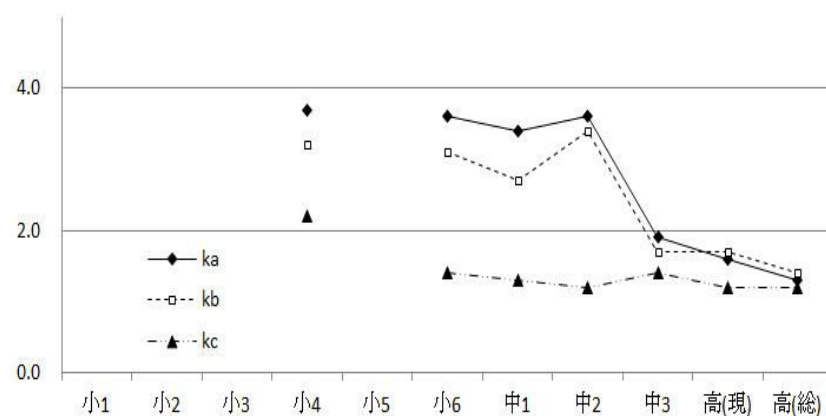
本調査で得られた故事成句は全部で563句のうち54句(9.6%)である。ここでは熟語とことわざに分けられるが、漢字熟語は41句で故事成句の76%を、ことわざは13句で24%を占めている。

次の〈表5〉と〈図3〉は故事成句に対するkの理解度を学年別の詳細である。

〈表 5〉 k の形容詞慣用句の理解度

学年別 (語句数)	小1 (0)	小2 (0)	小3 (0)	小4 (1)	小5 (0)	小6 (7)	中1 (6)	中2 (1)	中3 (16)	高現 (18)	高総 (5)
k a	-	-	-	3.7	-	3.6	3.4	3.6	1.9	1.6	1.3
k b	-	-	-	3.2	-	3.1	2.7	3.4	1.7	1.7	1.4
k c	-	-	-	2.2	-	1.4	1.3	1.2	1.4	1.2	1.2

〈図 3〉 k の故事成句の理解度



13) 飛田良文編(1998)『日本語百科大事典』大修館、p.1129.

〈表5〉によると、故事成句の出現頻度が中学3年以後に偏っている反面、それに当てはまる理解度はk全体で下がっているのが分かる。しかしkの平均理解度が「2.7(ka)、2.4(kb)、1.4(kc)」であるに比べ中学3年以後はkaとkbの折れ線のグラフの山がほぼ重なっており、かえってkcとの隔たりもあまり見られない。まず例14)と例15)はka・kbの理解度の高低の動きがおおむね同じなことわざである。

- 例14) ・千里の道も一歩より(小6) ・急がば回れ(小6)
 ・石橋をたたいて渡る(小6) ・目に入れても痛くない(中3)
 例15) ・情けは人のためならず(小6) ・犬も歩けば棒に当たる(中1)
 ・旅の恥はかき捨て(高) ・魚の目に水見えず(高)

まず例14)のように韓国語にも同義同型のことわざが存在する場合は、全体の意味がそのまま対応でき理解度も「3～4」の後半で高くなる。しかしそもそもことわざは、その国の風俗習慣・生活経験・喜怒哀楽などの影響を受け昔から言いならわされてきたものである。

同義異型や日本固有のものの場合である例15)は、ka・kbともにその理解度が「1～2」前半に止まっている。これらは構成語の字義通りの意味や構成語間の固定性などでは把握できないものが多い。この類型を韓国語に理解する仕方としては、日本語の故事ことわざを成している構成語彙のありさまをそのまま縷説するか、類義を持つ韓国語の故事ことわざに代置するかなどの方法を取る必要があると考えられる。

一方、漢語熟語とは2字以上の漢字文字で作られた含蓄のある簡潔な表現であるといえ、字数に比べて情報量が多く、中国に出典のある故事や漢文から作られたものが多い。このような熟語は韓国語にも同義同型がよく見られる。例16)から例18)を見てみよう。

- 例16) ・半信半疑(小6) ・五十歩百歩(中2) ・竹馬の友(中2)
 ・以心伝心(中3) ・天下一品(中3) ・美人薄命(高)
 例17) ・机上の空論(小6) ・孟母三遷(中1) ・九死に一生(中3)

例18)・九分九厘(中3) ・一分一厘(高) ・十重二十重(高)

例16)と例17)は同じく日韓両国語で同義同型を成している。しかし例16)は理解度が平均「3.8」を上回るに比べ、例17)の平均理解度は「2」前後ほどにしか過ぎない。それに例18)は韓国にはない日本固有の熟語であって、kaとkbは両方とも理解度「1」程度で極めて低い。

5. おわりに

以上のように日本語の慣用句を「動詞慣用句、形容詞慣用句、故事成句」に分類し、個々に対する韓国人学習者(=k)の理解度を学習段階別に分析・検討した。分析結果は次のようにまとめられる。

まず動詞慣用句についてである。慣用句の前部に同じ身体語彙があっても後部に「かける・つく・とる・うつ」などの多義動詞が用いられる場合、その理解度の個人差は甚だしい。それぞれの語句において後部要素の意味の実質性が強いものの場合、学習者がそれらの意味を推測する際、母語の転移を起こしがちになる。また感情や心情・態度を表す慣用句、母語としての漢字語彙力で見当がつく表現型慣用句、比喩的慣用句の場合はkaとkbとの理解度にあまり差がみられない。

二つ目は形容詞慣用句である。それらの出現頻度は動詞慣用句に比べ極めて少ない反面、kの理解度は動詞慣用句より低いと調査された。特に学年が上がるにつれ構成語としての身体語彙数が減るとkの理解度も落ちてしまう傾向があり、それは高校に至ってからもっと著しい。また比喩的慣用句は、否定形でのみ用いられるもののようにより比喩的慣用句になるため注意を要するべきである。

三つ目は故事成句である。故事成句は中学3年以後に偏って現れ、それらの理解度は中学3年から下向する。特に中学3年以後はkaとkbの折れ線のグラフの山がほぼ重なってkcとの隔たりがあまり見られない。

一般的に慣用句についての理解はその他の全体的な日本語学習力に

比べ低いと言える。そのため本研究ではより現実的な観点から実態調査を行い、日本語教育における慣用句学習の必要性を明らかにした。また日本語教育現場にも適用できるように学習段階別の体系的な研究はこれからも肝要であると言える。

一方、日本語教育に携わっている立場からは、慣用句との出会いを教科書や学習者の会釈などに任せるだけでなく、積極的に調査研究をさせたりして、学習段階別に身につけさせることを工夫せざるを得ない。

参考文献

- 教育人的資源部(2003)『文化を知る』두산, pp.4-20.
 宋誓天(2009)「故事来歴に基づくタイプの日韓国語の対照分析」『日本語文学』第47輯, 日本語文学会, pp.37-56.
- 石田博史(1989)「身体語彙に関する慣用表現」『言語』18、大修館、p.31.
 金子百合子(1985)「国語教育における慣用句」『日本語学』4-1、明治書院、pp.77-78.
 国広哲弥(1985)「慣用句論」『日本語学』4-1、明治書院、pp.5-8.
 国語教育研究所編(1991)『国語教育研究大辞典』明治図書、p.151
 阪田雪子(1985)「日本語教育における慣用句」『日本語学』4-1、明治書院、pp.89-90.
 島本基(1998)「日本語教育と慣用句ーいつ・どれだけ・どれをー」『無差』第5号、京都外国語大学日本語学科、p.69.
 文部科学省(1998)『中学校学習指導要領』文部科学省、pp.9-11.
 飛田良文編(1998)『日本語百科大事典』大修館、p.1129.
 宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院、pp.238-265.
 〃(1999)『敬語・慣用句表現論』明治書院、pp.214-341.
 森山新(2000)『認知と第二言語習得』啓明出版、p.85.
 宋誓天(2005)「韓国の日本語教育における慣用句の研究」『日本文学研究』第40号、梅光学院大学日本文学会、pp.1-14.

*〈資料1～3〉は、本稿の調査で用いた慣用句である。
 教科書の詳細は本稿の（脚注8）を参考されたい。

〈資料 1〉小学校の『国語』の慣用句

▶ 小学1

(東)間に合う、耳をすます、気をつける、気が変わる、声をかける

(光)おなかがすく、年を取る、目を覚ます、気にする、気がつく、あっという間

▶ 小学2

(東)気に入る、傘をさす、音を立てる、手が速い、お茶を入れる、顔を向ける、目を向ける、肩を貸す、目をそらす、しわを作る、声を飲む、目が潤む

(光)顔を出す、目が覚める、目を丸くする、手当てをする、手に入れる、目を細める、口をきく、首をかしげる

▶ 小学3

(東)口をそろえる、気になる、目に飛び込む、役目になる、頭をかかえる、手を振る、手にする、手を引く、目が光る、首を出す、目に合う、歯を食いしばる

(光)口を閉じる、役に立つ、目に立つ、目を落とす、手を離す、手に取る、足を広げる

▶ 小学4

(東)足を引く、両手を合わせる、頭をかく、手を突く、息をする、足を止める、目につく、口に運ぶ、声を上げる、目にする、見当がつく、声が起こる、火をつける、目をつぶる、目が集まる

(光)耳をかたむける、首を振る、息をつく、身を清める、肩を落とす、胸をおどらせる、声を出す、声をたてる、お茶をたてる、目をかける、ひどい目にあう、足音をしのばす、足がはやい、石の上にも三年

▶ 小学5

(東)顔をしかめる、息をのむ、気を配る、後につく、手をのばす、腰を折る、手がかかる、目に入る、虫がつく、風邪を引く、お世話になる、泡を食う、心をいためる、口を開く、腰を抜かす、眼に止まる

(光)文句をつける、手を反す、身を粉にする、実を結ぶ、大事にする、声を届ける、声はずむ、身につく、声をもらす、先頭に立つ、不意を打つ、息をつめる、気にかける、元も子もない、目をやる、気を引く、目を移す、気を静める、胸がすく、気が晴れる、気に留める、目をくれる、横になる、気が軽い、気が重い、一、二を争う

▶ 小学6

(東)気がとがめる、目にうかぶ、頭を下げる、身をけずる、気を取る、口にする、心を通わす、力を貸す、手を入れる、罪を着せる、目がくらむ、急がば回れ、情けは人のためならず、石橋をたたいて渡る、好きこそものの上手なれ、千里の道も一歩より、暑さ寒さもひがんまで

(光)心を引かれる、心を引く、意地を張る、そっぽを向く、目に遭う、種をあかす、大声を上げる、腹が立つ、顔をかくす、手を出す、目が移る、体をこわす、おしりに火がつく、気が遠くなる、しりもちをつく、世話をする、産声上がる、胸にせまる、目にしみる、血をはく思い、胸をふくらませる、夢中になる、棒だちになる、罰が当たる、顔から火が出る、嫌気がさす、気が気でない、胸にひびく、我を忘れる、半信半疑、合点がいかない、効き目がない、手も足も出ない、

〈資料 2〉中学校の『国語』の慣用句

▶ 中学 1

- (学)目を背ける、のどを通る、手をつける、頭が真っ白になる、声をひそめる、鍵を握る、間が抜ける、足を運ぶ、口を結ぶ、話が弾む、目を光らす、お目にかける、心を打つ、耳に入る、顔を合わせる、面と向かう、気がすむ、息を引き取る、手を取る、手を結ぶ、手に乗る、さじを投げる、胸が踊る、胸に納める、胸を打つ、墓穴をほる、横車を押す、足が出る、首を切る、みっともない、手がない、頭が堅い、気がおけない、根も葉もない、耳が痛い、面を打つ、鼻が高い
- (村)間をおく、気がいらだつ、精が出る、首をのばす、足が震える、目をこらす、肩を震わせる、耳をそばだてる、えらい目にあう、気合を入れる、人目につく、心を奪う、手間を省く、血眼になる、身にしみる、汗をかく、舌を鳴らす、我に返る、ほおを染める、肩を並べる、腹を割る、耳を疑う、舌を焼く、将棋を指す、愛想をつかす、人手に渡る、気が楽になる、鼻につく、血相を変える、座右の銘、五十歩百歩、背水の陣、郷に入っては郷に従え、犬も歩けば棒に当たる、目に入れても痛くない、非の打ちどころがない、歯が立たない、口が堅い、根掘り葉掘り、好い面の皮、世話を焼く

▶ 中学 2

- (学)うそをつく、気を許す、気を使う、情けをかける、角が立つ、胸に来る、胸が締めつけられる、目が留まる、耳を傾ける、手を打つ、肩をたたく、汗をにぎる、精も根も尽きる、小耳にはさむ、胸を張り裂ける、気が狂う、気が利く、口を出す、人を食う、折に触れる、拍子を取る、
- (村)口を閉じる、肩をすくめる、手に職をつける、腕をあげる、都合がつく、全力を尽くす、案の定骨が折れる、面を食らう、癰癤を起こす、間を取る、四肢を投げ出す、目が向く、気が長い頭をもたげる、死力を尽くす、間がある、腕前を上げる、念頭におく、腰を落ち着ける、目を通す、竹馬の友、あてにならない、相づちを打つ、

▶ 中学 3

- (学)声を漏らす、精を出す、親指を立てる、足を抜く、しっぽをつかむ、心を詠む、耳にしみる、またをくぐる、番をする、財布のひもを締める、数珠つなぎになる、目を見張る、やけを起こす、矢面に立つ、尻尾を巻く、首を長くする、手に握る、当てもない、手につかない、顔色が悪い、とんでもない、目と鼻の先、胸によりをかける、
- (村)年季が入る、知恵を絞る、重荷になる、待ちに待つ、つじつまが合う、桁が違う、骨を惜しむ、大目に見る、役が御免になる、気がめいる、峠を越す、お茶を濁す、棚に上げる、襟を正す、しのぎを削る、口が酸っぱくなる、二の舞を演じる、ビリオドを打つ、腰をすえる、苦杯を喫する、肩の荷が下りる、鼻にかける、頭が下がる、口が滑る、足が棒になる、腹にすえかねる、腕を振るう、指をくわえる、歯を食いしばる、手を加える、歯止めをかける、肩で息をする、目を鍛える、根を下ろす、声をのむ、九分九厘、四苦八苦、九死に一生、天下一品、百戦錬磨、浅学非才の身、心機一転、東奔西走、泰然自若、起死回生、朝令暮改、机上の空論、以心伝心、生死の淵 榮枯盛衰、わらにもすがる、一も二もな

い、水の泡、気が済まない、かけがえのない

〈資料 3〉高等学校の『国語』の慣用句

▶ 現代文

(三)道は開ける、痛い思いをする、われを忘れる、あぐらをかく、目を奪われる、手が加わる、無駄にする、枷をはめる、節を屈する、顔色を変える、久闊を叙する、産を破る、目にさらう、点滴を打つ、腰をかける、見もしらぬ、口が動く、顔をうずめる、気が散る、心を曇らす、胸に一物がある、目をつける、敬意を払う、恥をかく、目を白黒させる、らちが明かない、目に触れる、気を揉む、耳を澄ます、けりがつく、歳を取る、胸をかきむしる、口に運ぶ、酔いが回る、身の毛がよだつ、気を止める、泡を吹かす、まぶたを下ろす、長い息をはく、目をつぶる、手間を取る、こけが生える、目玉になる、手数がかかる、始末をつける、手が回る、身を潜める、膝をかがめる、目にしみる、手を触れる、お株を奪う、気に病む、顔が青ざめる、顔を見下ろす、骨を振る、鵜呑みにする、気が引ける、つかみどころがない、融通がきく、尻馬に乗る、孟母三遷、天変地異、畏怖嫌厭の情、無我夢中、切磋琢磨、手ごたえがない、気に食わない、目が離せない、面目がない、仕方がない、やむを得ず、思いもかけない、潔しとしない、歯牙にもかけない、死んでも死にきれない、突拍子もない、魚の目に水見えず、理が非でも、次から次へと

(第)手を合わせる、途方に暮れる、首を縮める、人目にかかる、息を殺す、念を押す、目に映る、口をとがらせる、歯車が狂う、合図をする、耳を傾ける、眉をひそめる、頭を悩ませる、溜息をつく、目をつぶる、手を休める、骨をうずめる、目を留める、とりとめもない、虫がいい、見当がつかない

▶ 総合国語

(三)名を成す、顔に泥を塗る、顔を立てる、顔をつぶす、面目を保つ、籍を置く、駄目になる、腕を持つ、一丁前になる、くせになる、肴になる、腸を絞る、足を進める、後から後から、腕をこまぬく、先を越される、口を切る、我に返る、足を向ける、色を失う、後ろ盾になる、下心を持つ、度胸がある、足を滑らす、胸が塞がる、迷惑をかける、肩に力が入る、年月を経る、爪を立てる、幅を利かせる、世を渡る、目を驚かす、気が起こらない、手足を縛る、暇を盗む、足を休める、筆を走らせる、色を正す、骨に徹する、会釈をする、肩をそば立てる、名を惜しむ、名を得る、血の気を失う、唇をしめる、倫を絶する、正鶴を射る、美人薄命、笑止千万、有名無実、予定調和、行住坐臥、五里霧中、顔向けができない、傍若無人、十重二十重、優柔不断、疑心暗鬼、一分一厘、血の気がない、口が早い、縁がない、居心地が悪い、居場所がない、口が重い、耳へ入らない、都合がいい、きまりが悪い、旅の恥はかき捨て、頭から足の先まで、瓜二つ、無我の境

(第)口に合う、かたをつける、目に付く、身を縮める、足音を盗む、鼻を覆う、鼻で笑う、腹が鳴る、多岐にわたる、心にしみる、肝が据わる、躍起になる、気が差す、首をくくる、似たり寄ったり、足をすくう、首を振る、半死半生、森羅万象、空々漠々、虎視眈々、天涯孤独、間が悪い

성 명(한 글) : 송 서 천

(한 자) : 宋 誓 天

(영 어) : Song, Seu-Chen

논문영어제목 : A Study on the Current status of Understanding
of the Idioms of Learning by Level of Japanese
Language Learners

소 속 : 세명대학교 강사

E-mail : sseuchen@naver.com

투 고 일 : 2014년 1월 10일

심사개시일 : 2014년 1월 13일

심사완료일 : 2014년 2월 4일